

さまざまな出来事の観察、体験されるとともに、宗教民俗的にも特徴づけるべき想像力が喚起されているように思われた。

看取りの文化考——がん患者遺族の語りにもとづいて——

井藤美由紀

高齢化社会は、現代日本にはじめて生まれた現象ではなく、江戸時代にもあった。年長者を敬い、孝行を「人の道」として重んじる政策をとった幕府は、家長が老親を看取することを重んじる教育や制度を整え、家族や親族のない者は地域社会で看取るように指導した(柳谷慶子『江戸時代の老いと看取り』山川出版社、二〇一一)。その後時代が移っても、日本では長らく、看取りの責を負うのは基本的に家族或いは親族であり、それが叶わぬ場合は地域社会に委ねることが続けられてきた。

しかし、戦後六十年余りの間に、看取りの場は、家や地域社会から病院の中へと移行し、看取りを取り巻く状況は様変わりした。社会構造の変化に伴い、核家族が増。家族役割についての考え方も、老いや死との向き合い方も、死と葬送の民俗に対する考え方も、すっかり変わった。人が死に逝く過程に立ち会い、そこで生まれる感情や感覚を、身近な人々と分かち合う。そして、死がもたらす非日常性を、日常生活の枠の中に納めてゆくために、地縁・血縁関係者がこぞって協働する中で、脈々と受け継がれてきた何ものかを、「看取りの文化」と呼ぶとすると、今の日本には、そんなものがあつたということさえ、思い描けない人の方が、多いのではなからうか。そこで本発表では、二〇〇八年に実施した、がん患者遺族へのインタビュー調

査の成果から、後藤富美子(仮名)さんの事例(「お迎え」に関するエピソード)を紹介し、「看取り文化」の現在についての一考察を発表する。

後藤富美子さんは、医師が終末期の夫(啓司さん)に「お迎えが来たらしいですね」と話しかけた時、義父母を看取った時の記憶が甦ると同時に、目から鱗が落ちた。自分が妄想だと思いついていた現象を、「お迎え」と捉えることができる。「科学者である医師」がそう告げていた。富美子さんの語りを辿ると、「お迎え」という概念が、啓司さんと富美子さんがこの世で一緒に過ごす最後の日々を、ほのかに明るくしたことが伺える。また、死別後の深い悲嘆の底から、富美子さんが納得して立ち上がる過程でも、「お迎え」を肯定することで獲得した他界観や霊魂観が、有効に働いたことが伺えた。富美子さんは啓司さんとの死別三年後に実施したインタビュー調査で、啓司さんを看取った後、「魂」の実存を信じるようになり、いわゆる伝統宗教とは違う形であるが、実感を伴う「宗教」を持つようになったと語った。「看取る」という営みには、生と死の境界領域で生きること余儀なくする力が働く。再び生が満ち溢れる日常世界に適応するためには、看取りの文化の中に息づく伝統的な宗教的世界観に一旦深く沈潜し、癒されることが必要なのかもしれない。

「看取りの文化」と言えば、万葉集の昔から、昭和初期まで全国各地で見られた「タマヨビ」は、その代表格ではないかと思われる(井之口章次『日本の葬式』弘文堂、一九七七)。だが現在、「タマヨビ」にリアリティを感じる人は、果たしてど

れほどいるだろうか。

高度経済成長期以降に顕著だった傾向のひとつに、自然科学的思考に対する傾倒があげられる。「タマヨビ」や「お迎え」の背後にある宗教的世界観は、看取りの場が生活の場から病院の中に移行してゆくにつれて、客観的証明もできず、リアリティも感じられない「怪しい話」や「迷信」として、全般的に価値が貶められていったのではなからうか。

しかし、面白いことに、「怪しい話」は、自然科学的思考のおかげで飛躍的に進歩した医療界の一角で、命脈を保っていたようだ。近年の出版物を見ても、「看取りの文化」の主な担い手は、人間らしい最期の実現を支えようと努力を重ねてきた、終末期医療の現場や老人福祉施設で働く専門職達なのではないかと思われる(國森康弘『いのちつぐ「みとりびと」』全四巻、農文協、二〇一二、村瀬孝生『看取りケアの作法』雲母書房、二〇一一等)。

現代韓国における自然葬の思想

田中 悟

本研究は、現代韓国における自然葬の位置づけを概観し、その歴史的な文脈と現代的な意味について考察を進めるものである。考察の手がかりとして、自然葬に関する韓国国内の研究を取り上げ、その議論の筋道を追うことで、韓国における自然葬をめぐる議論の主要論点を整理する。その上で、日本における自然葬の議論を参照しながら、自然葬の意味付けに関する韓国的な特性について考えていきたい。

本研究では、韓国の自然葬に関する先行研究として、特に以下の三本の論文を取り上げた。『韓国地籍情報学会誌』第一巻第一号(二〇〇九)に掲載されたチョドクヨン・イムイテク「大韓民国葬墓制度に関する研究」は、韓国葬墓文化の変遷過程を踏まえた上で、葬墓制度の現況と問題点を論じ、その改善案について論じた研究である。また、『浄土学研究』第一二輯(二〇〇九)に掲載された安佑煥「葬事文化の変化にともなう自然葬の研究」は、先のチョドクヨン・イムイテクの研究で論じられた葬墓文化の変遷の結果として登場し、注目されている自然葬を取り上げ、その定義と理論、また韓国における自然葬の現状と将来的な発展の方策について論じている。さらに、『保健福祉フォーラム』第一六七号(二〇一〇)に掲載されたキムギョンレ「墓地の価値に関する研究」は、墓地によって蚕食されている国土の価値の試算を試みた論考であり、墓地による国土の蚕食予防策の一つとして自然葬を位置づけるものである。「埋葬(土葬)文化から火葬文化へ」という韓国葬墓文化の変容を、墓地面積の拡大による国土の蚕食や、都市化・核家族化による墓の継承の困難、あるいは墓地不足・火葬場不足といった社会問題の観点から取り上げるこれらの先行研究において論じられる「自然葬」は、日本においてイメージされるそれとはかなりの違いを見せている。

その違いの核心は、「自然環境保護」という観点は優先されない、という点にある。現代韓国では、「国土の効率的な活用」と「死の空間の、生者の生活環境への編入」のため、自然葬のための場所はアクセスに便利でなおかつ快適な空間でなければ